

小島信夫「馬」論 —作品の象徴性に着目して—

楊琇媚/ Yang, Hsiu-Mei

南臺科技大學應用日語系助理教授

Department of Applied Japanese, Southern Taiwan University

【摘要】

「馬」這部小說因為曾被改名為「馬或政治」，因此筆者認為此作品與政治有著某種關聯。此外，作品中與政治相關或具時代性之語詞也不少。本論文透過結合作品的時代背景及當時的日本政治狀況探討了此作品的象徵性。其結果得知「馬」透過了隱喻的手法描寫出戰後的「美國影子」，是一部具有社會及政治表象的小說。

【關鍵詞】

小島信夫、馬、象徵性、吉田茂、美國

【Abstract】

"Uma", the novel, was once retitled to "Horse or Politics". Therefore, i believes there is some relation between this work and politics. In addition, there are many political or time background related words. This paper is to probe into the work's symbolism by combining its time background with political conditions.

It's been found out that "Uma" describes the post-war America shadow by a metaphor, which results in concluding it a social and political presentationism novel.

【Keywords】

Kojima Nobuo, horse, symbolism, Yoshida Shigeru, America

一、はじめに

「馬」という作品は『近代文学』（昭 29. 8）に発表された「家」と、『文芸』（昭 29. 8）に発表された「馬」という二つの作品をまとめて、一つの短編小説にしたものである。小島信夫は、初めこの短編小説に対して「馬又は政治」という題名を付けて『アメリカン・スクール』（昭 29. 9、みすず書房）に収録したのだが、『新日本文学全集第九巻』（昭 39. 3、集英社）に再録した際に、「馬」と改題したのだという¹（以下本稿で特に断りなしに「馬」と述べた場合は、『新日本文学全集』の「馬」を指す）。「馬又は政治」が発表されて十数年後に、後に小島の代表作と見なされるようになる「抱擁家族」が『群像』（昭 40. 7）誌上に発表された。村上春樹は、『抱擁家族』をより正確に読み解くためには、まず「馬」をしっかりと押えておく必要がある」と述べており、小島文学における「馬」の重要性を指摘している²。しかし、この作品に関する先行論文はそれほど多くないのが現状である。

「馬」は全十二章から構成された作品である。普通のサラリーマンである主人公の〈僕〉は、三年前に立てた家のローンの返済に追われ、馬車馬のように働いているのだが、ある日突然、妻のトキ子から、庭に新たに家を建てる、と告げられる。恐妻家の〈僕〉は一応抵抗の姿勢を見せたものの、結局は妻に説き伏せられ、彼女の計画通りに新しい家の工事を始めることとなった。ところが、新しい家の一階が馬小屋になるという〈僕〉の与り知らない事実が明かされ、〈僕〉は再び衝撃を受けることとなる。

先にも触れたが、この作品には当初「馬又は政治」という題が付けられていたのだが、その点に着眼するならば、同作品には何らかの意味での政治的な寓意が込められていることも予期される。浅川淳も、「小島の「馬」という作品に、「または政治」という副題的なものが付け加えられたことは、きわめて象徴的な意味を持っていた」³と語っており、作品が政治的象徴性を有すること

¹ 村上克尚「戦後家庭の失調——小島信夫「馬」の政治性について——」（『國語と國文學』2014. 6）p. 36。また、村上によれば、「「家」は、トキ子による家の新築を描き、現行の「馬」の「三」の半ば、「してみると僕とは何であり、この次第にひろがるこの家とは何であろう」までを含む。他方、旧「馬」はそれ以降に相当し、トキ子が新築の家の一階に馬を迎え入れる顛末が描かれる」という。

² 初出「若い読者のための短編小説案内—小島信夫「馬」」（『本の話』、文藝春秋、1996. 4～5）。引用は村上春樹『若い読者のための短編小説案内』（文藝春秋、2004. 10）による。p. 69

³ 浅川淳「「仕方のないことだ」—小島信夫のこと」（大橋健三郎他編『小島信夫をめぐる文学の現在』福武書店、1985. 7）p. 249

を示唆している。実際、作品では「まるで自由党の吉田みたい」や「これではまるで待合政治ではないか」といった、政治に関わる発言も存在している。

また、上述の政治に関わる発言以外にも、「朝鮮軍司令官」「汚職」「水爆」などの時代性を感じさせる言葉も少なくない。にもかかわらず、作品の構造にそって、それがどのような時代的ないし政治的象徴性を持つものであったのかという検討作業はこれまで十分に行われてはこなかった。果たしてこの作品にはどのような象徴性が仮託されているのか。本稿ではまず、〈僕〉とトキ子との間に作られた力学的構図を浮き彫りにすることにより、作品の時代背景にある社会問題との関係性から分析を加えてみる。そして、作品における時代背景や当時の日本の政治的状況を踏まえながら、小説「馬」がどのような象徴性を持っているのかを明らかにしていくこととしたい。

二、夫婦関係における力学的構図

主人公である〈僕〉の家は、子供のいない、サラリーマンの〈僕〉と専業主婦の妻トキ子からなる、いわゆる核家族家庭である。一応〈僕〉の家庭は、夫が外で稼ぎ、妻は内で家庭を守るという、近代的性別役割分担をしてはいる。しかし、「男が指揮し、女が従う」というような家父長的価値観が〈僕〉の家庭では通用していない。むしろ、「トキ子が指揮し、〈僕〉が従う」というような「女尊男卑」の家庭として設定されているのである。こうした設定はむしろ時代的な背景とは無縁ではない。

周知のように、戦後の日本は、アメリカを中心とするGHQの占領によって、家制度の解体や女性の解放などの民主化が進められていた。つまり、日本の戦後の家族（＝「家族の戦後体制」）は、家制度的な家族から、戦後の民主的家族へと制度的に変革しつつあったのである⁴。こうした民主化の影響が加わることによって、戦争の敗北によってもたらされた男性としての権威の失墜こそが、「女尊男卑」の〈僕〉の家庭を形作っていたのである。また、そこには、「男女平等」や「夫婦の平等」⁵などといった、いわば戦後の新しい価値観に

⁴ 金井淑子『女性学の挑戦—家父長制・ジェンダー・身体性へ』（明石書店、1997.5）p. 149

⁵ 1946年11月3日に公布された日本国憲法第二四条は、婚姻（結婚）について次のように定めている。

① 婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

対する逆説的な意味も含まれていたと考えられる。

「僕の歯の痛みにしろ、心のすみのウズキにしろ、トキ子の日常的姿を見ると」、「自分でもおどろくほど」それが「よみがえってくる」という描写や、「トキ子が僕に愛情の奉仕を要求し、僕を馬車馬のように働かせる」といった描写などから、トキ子が妻でありながら、〈僕〉に苦痛を与える存在でもあることが分かる。しかし、たとえ〈僕〉が「たえず本心は怒っている。トキ子に怒っている」と思いながらも、悪妻のごときトキ子に対して離縁を告げたりはしない。なぜなら、〈僕〉は「トキ子との結婚に入るさいに、愛の告白をした」ため、「義理がたい」〈僕〉はその誓言を守らなければならないという「倫理」意識をも持たざるをえなかったからである。ときには、〈僕〉はトキ子に反抗しようとするのだが、そのとき、彼女は決まって「僕の愛情を疑った言葉を吐きだし、昔日の「愛情の告白」をもち出し、僕の裏切りを責め」たり、「愛情の不足を詰られたあげく、さるところに人質同様にアルバイト勤めをすることで、金を払わせられたのだ」という。

こうして、かつての「愛の告白」という「貴重にして悲しむべき言質」をトキ子にとられてしまったために、トキ子の前での〈僕〉は少しも権威を持たず、いかにも去勢された男性として作品中に存在している。また、〈僕〉に権威はなく、トキ子が家庭の主導権を握っているような関係性の中で、〈僕〉は常にアイデンティティの喪失に悩んでもいる⁶。

日本におけるロマンティックラブ・イデオロギーは、西欧から輸入されたものだと言われている⁷。また、このイデオロギーは、特に戦後急速に広まっており、見合い結婚ではなく、男女同士が恋愛によって結婚を決めるようになったという変化は、日本社会の欧米化の進展の証拠として歓迎されていた⁸。そうした時代背景の中で、〈僕〉とトキ子の結婚はおそらく互いの恋愛感情や自由意志によって誓約された恋愛結婚であった可能性が高い。しかし、トキ子が

② 配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の平等に立脚して、制定されなければならない。（伊集院葉子他著『歴史のなかの家族と結婚——ジェンダーの視点から』森話社、2011.4）p. 206～207

⁶ たとえば、「トキ子との結婚以来、僕はぼくであったことはほんのわずかなじかんだ。どこにいても僕はトキ子の亭主で」（p. 194）あることや「してみると僕とは何であり、この次第にひろがるこの家とはなんであろう」（p. 198）といった描写が挙げられる。

⁷ 千田有紀『日本型近代家族—どこから来てどこへ行くのか』（勁草書房、2011.3）p. 25

⁸ 同注7、p. 27

限りなく〈僕〉に愛情の証として金を稼ぐことを求めるため、〈僕〉は身動きが取れないまま、ただひたすらに働くしかなかった。〈僕〉は結婚するにあたって、「愛の告白」をしたことで、「馬車馬」のように働かされることになったというだけでなく、自我さえ見失ってしまっている。そこには、欧米化の象徴である恋愛結婚の妥当性に対する懐疑的な姿勢がかたちを覗かせているようにも見える。

このように、〈僕〉はトキ子にとっては単なる金稼ぎの道具に過ぎないのだが、それでも、〈僕〉は昼夜を問わず懸命に働くという苦勞の代価を賃金に代えることによって、トキ子に求められる「愛情の奉仕」に応えようとする。また、そうすることによって、〈僕〉はそこにせめてもの存在価値を見出し、安心感を覚える。この点については、以下のように描かれている。

（前略）思えば僕は日々、それが倫理であるかの如く、時間を埋めて仕事をしてきたわけだが、それがせめてトキ子のヘソクリになったと云われたときには、阿呆らしいような気持にはなりながら同時に、「倫理」が金にかわったその化け方に、この世の当然の成行を知り、僕は実体にカチンとつきあたって安心さえおぼえたのだった。（p. 202）

谷川充美は〈僕〉の覚えている「安心」には、「僕」を働かせる原理である妻への《愛情の奉仕》が《金》へと変わり、自らの愛情が実体化したことへの「安心」という側面があると指摘している⁹。つまり、うがった見方をすれば、〈僕〉とトキ子の愛情関係は金銭によって結ばれたものだとも見られるのである。ところが、そうした関係はひどく壊れやすいものでもあった。というのは、のちに、トキ子が友人から預かった馬の部屋代によって、新しい家が建てられつつあることが明らかになるにつれて、〈僕〉は「一種、あてのない寂寥感におそわれ」、夫としての唯一の存在価値さえ奪われてしまうからである。さらに、馬が実際に馬小屋に入ってそこに住むことにより、夫婦の関係も崩壊寸前になっていく。

⁹ 谷川充美「なぜ「家」を建てるのか—小島信夫『馬』における「家作り」—」（『安田女子大学大学院文学研究科紀要』2010.3）p. 50